2004年7月20日（火）

ジェンダーとセクシュアリティ・夏のリサーチについて

① テーマ（何についてのリサーチか）

OL経験のある現代女性エッセイスト（岸本葉子、など）が取り上げる女性問題とはなにかを調べ、その解決策として女性エッセイストが、エッセイというジャンルと言語でどのように問題解決の方法を見出しているのかを探る。

② 理由（なぜそれをリサーチするのか、何のために）

どの本屋でも現代女性のエッセイストのコーナーがよく目に付く。エッセイは、文庫本となってよく売れているし、著名なエッセイストが数多く輩出されている。又、テーマも、結婚、恋愛、三十代、四十代、老年期の過ごし方などとセルフ・ヘルプのものが多い。エッセイスト達は、だれに向かって、どんな内容を提示し、読者とのどんなコミュニケーションを設定しているのか。その時の言語としての表象を、これまで授業で習ったフェミニズム理論の観点から分析ができるのではないか、と考えた。

③ 何をどこまで明らかにしたいか？（仮説）

これまで授業で扱った理論を復習した上で、日本の現代女性エッセイストに限定し、いくつか代表作を取り上げる。例えば、岸本葉子の著作は以下のとおりだが、全て読むつもりだが、実際の議論のなかでどれを取り上げるかはまだ未定。「なまいき始め」「旅はお肌の曲がり角」「よい旅を、アジア」「３０前後、やや美人」「やっぱりひとりが楽でいい！？」「それでもしたい？！結婚」「炊飯器とキーボード」「三十過ぎたら楽しくなった！」「４０になるってどんなこと？」「家もいいけど旅も好き」「女の底力捨てたもんじゃない」と、彼女の作品は彼女自身の独身生活から題材を得たものが多い。もっと具体的に言えば、現代女性の問題は、仕事、結婚、育児、シングルの更年期、親の介護、年金問題などと細かくあげればきりがない。現在４３歳の岸本葉子さんというエッセイストは、ことばを武器にして、そのような問題へ独身者なりの解答を提示しているが、自分の認識を変えることで現実を生き易くしているところは、バトラーの「触発する言葉」で使われた真っ向から対立するのではなく別の次元からズラしてその場をかわす構図が見える。他にも、フェミニズムの理論を参照できる箇所を探し、フェミニスト理論の指摘を、現代日本女性の現実生活にあてはめてみる作業をしていきたい。

また他にもアエラ編集部編「女は私で生きる」酒井順子「負け犬の遠吠え」時実新子・玉岡かおる「モノ書く女への道」木村治美「エッセイを書きたいあなたに」なども参考エッセイとしたい。

④どういう方法でリサーチを行うか？

とにかく現代のものを取り上げたいので、岸本葉子など現代のエッセイストの著作を調べる。フーコー「作者とは何か」、バトラー「触発する言葉」、シクスー「メデゥーサの笑い」、スピヴァク「文化としての他者」などの見地から、現代日本女性エッセイストの作品を検証する。